



板橋区付近の自然はどう変わった？

筆者は昭和22(1947)年に板橋区栄町(旧板橋8か9丁目)で生まれた。幼い頃から魚捕りや虫捕りが大好きで、兄たちに連れら戸田橋付近やハゲ山(現茂呂山公園)などに行ったことを覚えている。小学校4年生の頃から同年代の仲間たちと赤塚ため池や徳丸たんぼ(現高島平)などに遊びに行くようになった。小遣いとして親から電車賃をもらっていたが、片道は歩き、残ったお金でアイスクャンディを買うのが楽しみであった。

ハゲ山手前の石神井川に架かっていた一本橋、下赤塚駅から松月院へ行く途中にあった漬物工場の巨大な桶、歩道がなく渡るのがこわかった旧戸田橋などの懐かしい風景は二度と見ることは出来ない。

失われてしまった風景と共に、消え去ってしまった生き物も多かったはずである。風景は多くの人たちに思い出として残り、その写真も少なからず残っている。一方その風景の中で生きていた鳥や魚、昆虫、植物は何の痕跡も残さずに消えていこうとしている。ごく一部であろうが、私の記憶に残っている生き物たちについて書き残しておきたい。

板橋ではいなくなってしまった種、大変少なくなってしまった種を中心に、現在は普通に見られる種についての過去の状況も、私が知っている範囲内だが以下に記してみる。思い出話なので学名などは省いてあるが、同定はほぼ間違いないと思っている。記録地点も正確なものを記すが年代は数年の幅がある。当時のメモや標本も少しは残っているはずなので、出てきたら正確なデータを書いておきたい。参考文献は一々記さないが、鳥については川内博氏、唐沢孝一氏、佐々木洋氏の著書を参考にした。

(1) アズマモグラ

私より上の年代の方に、モグラを一言で言えばと尋ねれば「畑を荒らす厄介者」と答える方が多いのではないか。浅い地中にトンネルを掘り、真上の作物の根を傷つけたりするのである。1950年代半ば頃まで、栄町の自宅庭にも生息し、死骸も時々転がっていた。あんな狭い庭でもモグラは住めたのであろうか。多分一生をまっとうするには狭すぎたと思われる。当時の自宅付近は、畑が直ぐそばにあり、道路は未舗装、道の端は雑草に覆われているという環境であった。道の中心部は締め固められ、砂利も敷いてあったのでモグラは道を横断するトンネルは掘ることが出来

なかったと思われる。地表面を夜間に移動していたのであろうが、大きな危険が伴う行動であったと推測される。モグラがいつ頃いなくなってしまったのか覚えていないが、自宅前の道路が舗装されたのが1956、7年頃から急速に個体数を減らしていたのであろう。

2000年以降、区内で私がモグラを確認した場所は、笹目橋付近の荒川・新河岸川河川敷、赤塚新町3丁目光が丘公園、西台1丁目西台公園（少ない）赤塚5丁目赤塚公園である。モグラ塚の特徴を覚えれば確認は容易いので、2010年以降の分布地を探してもらいたい。

なお哺乳類で私が板橋区内で確認した種は、ハタネズミ（荒川河川敷戸田橋付近）、ホンシユウジネジミ（荒川河川敷笹目橋付近）、アブラコウモリ（区内全域）、タヌキ（区内各地）である。

(2) モズ

現在も秋から春にかけ赤塚公園や荒川河川敷でモズはやや普通に見られるが、1960年代以前には区内全域に生息していたと推測される。ただし春から夏の繁殖期にいたかどうかは記憶にない。秋、高鳴きの季節になると赤塚溜池付近では最も目立つ鳥であり、個体数も今に比べはるかに多かったであろう。

中学生の頃（1960年頃）モズの“はやにえ”を探したことがある。記憶に残っているのは自宅付近（栄町16）で見つけたものである。都営住宅の生垣に刺さっていたもので犠牲者はムカデだった。当時の都営住宅は平屋で庭がついており、各種の樹木が植えられていたが、未だ大きく育ってはならず、付近には草ぼうぼうの空き地も多かった。市街地ではあったが、鳥から見れば中・低木が混じった草原のようなものだったのではなからうか。

やはり1960年頃、茂呂山と石神井川の間（小茂根3-8付近）でもはやにえを見つけた。水田脇の草むらにあったもので、刺さっていたのはカナヘビの小型個体であった。当時は石神井川に沿

った狭い低地部のみが水田で、川から少し離れた所は一面の畑、安養院付近から東側には住宅地が広がっていた記憶がある。

1990年以降、区内での確実なモズ繁殖例は無いようだが、目撃例はかなり広い範囲にある。しかしこれらはほとんどが単なる通過、迷入例であろう。“はやにえ”がもし見つければ、その場所はモズが繁殖はともかく、冬を過ごせる環境を備えていると考えられる。

2000年以降、私が“はやにえ”を見つけたのは荒川河川敷のみだが、小豆沢から成増にかけての崖線部、赤塚公園



モズ 撮影：櫻井義一 2011年3月

一帯や白子川沿いを探せば各地で見つかるかと期待している。

(3) トビ

“トンビがぐるりと輪を描く”光景は1960年代前半までは都区内で普通に見られたが、後半には急激に減少したようだ。川内博氏は減少原因として都市内の生ゴミ処理が進んだことと、大きくゆっくり羽ばたく飛び方を挙げている。海岸や大きな湖で打ち上げられた魚の死骸を漁るのが、彼らの本来の生き方なのであろう。林立する高層ビル、猛烈な速度で移動する自動車が行き交う都会には不向きな鳥のようだ。

1950年代の栄町付近ではトビはカラスより多い鳥であったが、1960年以降は見た記憶がない。さして注意もしていなかったため、全く自信は無いが明治神宮や目黒自然教育園がある都心部より先にいなくなってしまう気がする。もちろん栄町付近には高層ビルはもちろん、自動車もまだ少ない時代であった。

昨年冬久しぶりに逗子、鎌倉付近に行った。目的の一つはトビを見ることである。相変わらず海岸にはトビが多く、観光客の食べ物を掠め取るという話も本当なのであろう。狭山湖、相模湖付近に較べると数十倍以上は多い感じがする。水辺から離れた山間でも見かける鳥だが、海岸線こそが彼らの本当の故郷なのであろう。

海から荒川に沿って板橋までやってきたトビだが、海に近い都心部よりも早い時期にいなくなってしまったのかもしれない。生ゴミ漁りのヒメヒラタシテムシ（現在も荒川河川敷に少数が生息）と共にトビがいなくなってしまうと私は以前に書いたことがある。子供の頃に馴染んだせいも今も私の最も好きな猛禽類は人気薄のトンビである。

(4) カラス

余り評判が良くないカラスだが私は好きである。動物写真家の周はじめ氏が書いた「カラスの四季」（1960年発行）という本を中学が高校のころに読んだせいである。北海道東部でカラスを数年間に亘り観察した記録が書かれているこの本のなかで、氏は「…東京のような大都会でも…ひとところよりは、ずっと少なくなってしまったことは確かである」と都会でのカラスの減少傾向について書いている。

子供の頃栄町付近ではカラスが少なかったのは確かである。まだ農村地帯であった茂呂山付近で「カラスが沢山いる」と驚いた記憶は残っている。カラスにはハシブトとハシボソの2種がいるということすら知らなかった頃のことである。

何時頃から栄町付近ではカラスが増えだしたのか記憶は無い。1970年代前半には東京区部でカラスが人を襲った例があるそうだ。東京区部のハシブトガラス増加の原因の一つは、市街地内の緑地の木が大きく育ち、ハシブトガラスがねぐらとして利用できるようになったからだという。東京区部のハシブトガラスは何回かの盛衰を繰返した可能性もあると思えるがどうなのであろうか。野村圭佑氏は19世紀前半に書かれた「武江産物誌」の中に“慈烏（からす）御蔵（浅草）に多し”があることを紹介している。“さとがらす（ハシボソ）山からす（ハシブト）”と区別され

ているそうだが、浅草のものがどちらかは不明のようである。

私がこの2種の差に興味を持ったのは去年あたりからである。現時点では板橋区内でハシボソガラスが割合見られるのは荒川河川敷のみのようだ。今年1月、自宅前でハシボソを確認した。電線に止っていた個体で姿と鳴声の両方を確認した。この一月前くらいだが、豊島病院付近でハシボソらしき鳴声を聞いているが自信はない。今後分布が拡大するかどうか興味を持たれる。

昨年冬埼玉県の小川町から武蔵嵐山まで東上線にそって歩いたが、水田や畑地で見たカラスは皆ハシボソであった。武蔵嵐山の駅前でこの日最初のハシボソを数羽見ることができた。前記の逗子鎌倉ではハシボソが多く、ハシボソは砂浜に止っていた1羽のみであった。去年、今年と数回登った奥秩父和名倉山で見たカラスはすべてハシボソだったが全部飛翔中ののものであった。

ついでにハシボソガラスの面白い行動を書いておこう。今から12、3年前の話だが世田谷区の羽根木公園で生梅をつつくハシボソを見ている。青梅の果肉に丸い穴を開け、中の種が見えているが、それ以上はつつかずに捨ててしまうようだ。作業中のカラスを数羽目撃しているの間違いはないが、果肉を食べたかどうかは判らなかつた。梅をつつく文化を共有するカラス社会が成立していたのである。仕事でだったのでカメラは持っていなかつた。その後行く機会がなくそのままになっている。この文化がまだ残っているかどうか誰か確認してくれないだろうか。

自宅屋上の浅い水槽でアメリカザリガニを飼った時、数日後10匹くらいだったが全部をハシボソが水槽から出してつつき殺してしまった。食べた形跡は全く無く、ただ捕まえてつつくことを楽しんだだけのようなようであった。

もう一つこれはハシボソ、ハシボソの確認はしていないがニンジンを食べるカラスを見ている。2011年3月初旬、埼玉県三芳町(両種の混生地帯)の畑に囲まれた道路の端に穴が空いたニンジンが落ちていた。周りの畑や路上を見渡すとあちこちに穴あきニンジンが落ちている。出荷できなかったニンジンが畑の縁に積み上げられている。カラスが一羽ニンジンをつついている。一羽のカラスだけでこんなに沢山の穴あけ作業が出来るわけがない。穴の大きさから見ると、カラスはニンジンを胃袋に納めたと思われる。ニンジンがカラスの栄養になるとも思われぬ。味が気に入ったのであろうか。

インターネットで検索してみると、カラスがウメ、ニンジンを食べたという記事が出てくる。ウメを食べたというものは少ないが、青ウメを食べた例、実験的に食べさせたら食べた例が出てくる。赤塚城址の梅園では私はカラスがウメを食べるのはまだ見ていない。今後要注意である。日本各地でも観察例が増えるのか興味深い。

一方カラスがニンジンを食べた例はかなり多いようである。昔からある食害例なのか、最近になってからの事ならば、いつ頃からなのか、被害地域は広がっているのかなどを追ってみれば面白そうである。

(5) ヒヨドリ

増えた鳥の例が続くがヒヨドリも採り上げておきたい。1970年代前半、自宅向かいの民家に植

えられていたシュロの実に見知らぬ鳥がきている。調べてみるとヒヨドリであった。

森林性・山地性だと考えられていた本種が、1960年代末から都会に進出した過程は川内博氏が書かれている。原因として氏は人と鳥の付き合い方の変化や、庭木や街路樹に実のなる木、蜜が多い花が咲く木が増えたことを挙げ、戦後急増したミカン類の栽培がヒヨドリ増加のきっかけを作ったのではないかと推測している。



ヒヨドリ 撮影：櫻井義一 2010年1月

ヒヨドリの農業被害はカラス類に次いで多いという。果樹類と葉野菜への食害例が多いという。果樹類は判るが野菜への被害が多いというのが私には意外であった。白菜を食べるヒヨドリは私も見たことがあるが、珍しい例かと思っていた。地面に撒かれた餌をスズメと一緒に食べているヒヨドリを見たことがある。長い尾羽が地面についてしまい、なんとも不慣れな感じがした。やはり樹上性の鳥なのだという感想を持った。背の低い葉野菜類を食べる習性はヒヨドリ

りが割合近年になってから獲得したのではないか。これは私の全く無責任な仮説である。

(6) キジバト

小学生の頃、東武練馬や下赤塚に行くと「デデポー、デデポー」という鳴声が聞こえ、田舎に来たのだなー、という気がした。もっとも当時の栄町付近は現代の農村よりも田舎ぽかった。しかしキジバトがその頃栄町付近にいなかったことは間違いない。1960年頃までのキジバト分布は現赤塚公園付近一帯では普通、栄町、大山、常盤台付近には分布せず、上板橋や茂呂山付近は記憶無し、である。当時、人間にたいして非常に神経質な鳥だという印象は持っていなかった。

キジバトの都会進出は空気銃の禁止や鳥に対する人間の対応が変わったせいであると言われている。空気銃の弾など1960年代前半まではありふれており、子供もおもちゃにしていた。

毎日仕事で車に乗っていた1990年頃、キジバトが幹線道路の中央分離帯の植え込みには飛んで来ないことに気付いた。ムクドリ、スズメ、ハクセキレイは多数が中央分離帯で餌をつつついているがキジバトは見たことがない。同じ場所でも裏通りの静かな道路にはキジバトがこのこ歩いていた。ただし早朝はどうだったのかは見ていない。キジバトも自分が俊敏性を欠いていることを自覚しているのであろう。

(7) ホオジロ

1970年代前半、昆虫採集にも飽きて、双眼鏡を持って鳥を見る事を始めた。徳丸ヶ原は一面の

水田で、溜池はそのまま、赤塚公園はまだ整備されていなかった最後の時代である。4月まだ荒起こしも済んでいないたんぼの周りの藪でホオジロが囀っている。どこもかしこもホオジロだらけで、別の鳥がいまいかと探し歩いたものである。

現在板橋区内でホオジロが確実に見られるのは荒川河川敷だけであろう。しかも繁殖期には私は見たことがない。数年前、北区の赤羽自然観察公園で6月末にホオジロが1羽囀っており、一緒だった数人で確認している。

(8) カケス

1970年代前半の溜池付近で冬に最も目立つ鳥はカケスであった。行けば必ず見られる鳥で森の中、畑の周りなどどこにでもいるという感じであった。大雪が降った直後にも赤塚へ行ったことがある。崖線の雪を掻きわけ登ったり降りたりしたが、気温は低く、解けた雪でぬれることもなかった。あちこちから飛出すカケスの青が雪の中で目立つ、昔の赤塚崖線最後の光景として今も記憶に残っている。

栄町でも1970年頃カケスを見ている。隣家の柿の木に止っていたもので、翌年は柿の木の下歩いていた。2回とも柿が熟す時期、晩秋だったと記憶している。3年目は見られず、その後一回も見たことがない。暖かい時期に見たかどうかは記憶に残っていない。東京都区内のカケス繁殖記録はないようだが、狭山丘陵の記録はあったと思う。手元に文献がなく確認できない。

ここ数年昆虫調査で通っている奥秩父和名倉山はカケスが多く、11月初め頃は標高2000mの山頂付近までいる。今年2月に山頂まで登ったが、山は一面の雪でラッセル跡は皆無、2月以降は誰も登っていないようだった。山頂で姿を見た鳥はヒガラ1羽のみ、カケスはやはりいなかった。カケスが見られたのは標高1000m以下の場所で、二瀬ダム付近では数羽見ることが出来た。

過去の記録を調べる意味

余計な事まで書いてしまい、スペースが無くなってしまった。次回は鳥の続きとカエル、ヘビ、魚などについて書いてみたい。以下に過去の記録が意味することを簡単に書いておきたい。

モンシロチョウに良く似た蝶でスジグロシロチョウという蝶がいる。1960年代までは東京の市街地では草原性のモンシロは多数いたが、森林性のスジグロはいなかった。1960年代末からスジグロが市街地で急激に増えだし、70年代以降はモンシロよりも多くなってしまった。ところが1990年頃からスジグロは減り出し、現在は市街地にはいなくなってしまった。昔のように赤塚公園付近や成増あたりで細々と暮らす蝶になってしまった。

増えた原因は諸先生方が色々書いているが決定打はない。減りだしたことについては誰も書いていない。増えた年代はヒヨドリ、ミンミンゼミ、スジグロが一致するような気がする。3種の共通点は森林性である。しかし増えた原因が3種で共通するかどうかは判らない。今繁栄しているヒヨドリ、ミンミンゼミもいつかは居なくなるかもしれない。この謎を解明するためにまず必要なのが、分布範囲や個体数の記録を出来る限り残すことである。自然環境、社会状況の変遷と動植物の分布や個体数の変動を重ね合わせた時、生まれる物語を私は聞きたい。(釣巻岳人)

観察と活動の記録

- 1 1月17日(土) トンボ池清掃、バッタ広場ササ刈等
- 1 1月24日(土) トンボ池周囲の木の伐採、枯れた水草を含む草刈
- 1 2月15日(土) 湧水水路の点検と清掃(水路を塞いでいた倒木の処理、泥さらえ)
- 1 2月24日(土) ゴミ拾い、湧水は水路途中で漏水しているらしく池に流入しない。
- 1月19日(土) 講演会「身近な野鳥は今」(講師:日本野鳥の会東京・都市鳥研究会代表 川内博さん)(エコポリスセンター共催)参加者32名
- 1月26日(土) 湧水が池に流れなくなったので、再度湧水水路の泥さらえをした。浅くなった池から死魚3匹見つかった。
- 2月2日(土) 3日(日) 環境なんでも見本市に出展

環境なんでも見本市は環境教育を目的としたイベントで、来場者や他の出展者と交流もあり、今年も会の活動と赤塚城址の生き物のパネル2枚を展示。また、みんなで集めた身近な植物の種約50種を展示し、実体顕微鏡で精巧な種づくりを見て驚いたり、風に乗って飛ぶ種の模型をつくって飛ばしたりして好評だった。来場者の方々よりもまず会員が「種」をじっくり観察し、楽しめた2日間でした。



- 2月16日(土) バッタ広場ササ刈、トンボ池に湧水はわずかに流入している。
- 2月23日(土) バッタ広場ササ刈・セイタカアワダチソウ抜き取り。湧水はトンボ池に流入せず、水路途中で抜けている。雨が少ないため湧水量も減っているらしい。
- 3月2日(土) 3日(日) 赤塚梅まつりに出展。

2日は気温も10度前後、注意報が出るほどの強風の中、会員も高齢化しつつある中で、2日間の屋外での出展は寒さが堪えた。今年は寒さが厳しかったため梅の花も遅く、カエルもとうとう出て来ず、秋から冬にかけて雨が少なかったため湧水はトンボ池まで到達せず、干上がったままで、池を見る人も少なく、一男性から池が汚いという非難を頂戴し・・・池の魅力は乏しかったようです。しかし、「種のいろいろ」を展示したが、手に取ったりして好評だった。寒風の中でも来場者でにぎわ



干上がった池・今年はカエルも出現せず

い、私達のノコギリ体験コーナーの枝を輪切りにしたペンダントづくりも、用意した金具250個が全部なくなり、盛況だった。どういう訳か、この賑やかな会場にキジバトがやってきて、展示した種や私達の服やらに糞をして一騒ぎあった。

活動のお知らせ

運営委員会：4月27日(土) 5月18日(土) 12:30~13:30
作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。
連絡先；坂本(090-4618-1295)
会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく
日時：5月18日(土) 12:30~
活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで

1 白子川と湧水を見にいきます(雨天も実施)

白子川は湧水の多い川です。今回は光が丘公園近くの湧水池から、白子川の中につくられた水辺公園、川の風景を見て稲荷山・清水山憩いの森を訪ねます。白子川と流域の水環境を良くする会に案内していただきます。申込みは事務局へ。

3月23日(土) 9:55集合~13:00

集合時間と場所：東上線成増駅南口(改札口を出て右側) 9時55分集合
10時1分発の石神井公園駅北口行きバスに乗ります。

2 江東区のポケットエコスペースの見学(申込みは事務局へ)

小さなビオトープ池の先駆事例である江東区仙台東堀川公園にあるポケットエコスペースで担当された清田秀雄さんにお話を聞きます。

4月20日(土) 10:00 東西線東陽町駅1番改札口集合

3 赤塚ビオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

トンボ池については最小限オタマジャクシが生息できる程度の水位に維持します。降雨状況にもよりますが、湧水量が少なく水位低下が甚だしいときは水道水を補給します。

4月27日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等

5月18日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等

4 日暮台公園樹林地観察会(樹林地内の推移と林縁植物を観察)

4月6日(土) 5月4日(土) 10:00~11:00 日暮台公園前集合

4月には地面の緑色がいっそう鮮やかになり5月は草花も賑やかです。

ビオトープ管理のボランティア大歓迎

生き物のすめる草地(赤塚公園バッタ広場など)などの管理作業を応援していただけませんか。大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)